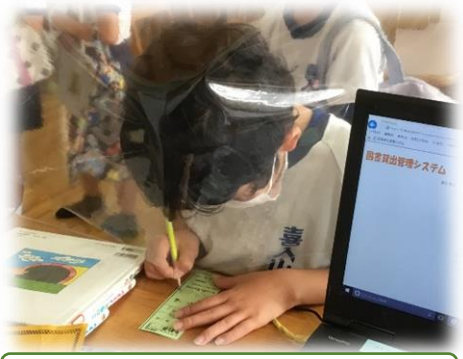
～　学校便り～

なつめ　11月号

〈編集・発行〉
鹿児島市立喜入小学校
〈発行日〉
令和２年 11 月 20 日

感動は心の扉を開く

校長　内　村　英　人



借りたい本を予約する１年生

御存知のとおり作家　椋鳩十氏の言葉です。鹿児島県立図書館長時代には，県立図書館が市町村の図書館運営を支援する図書館ネットワークの原型をつくられた方です。

椋氏のエッセイ「悪童からの変心」には，少年時代の本との出会いが書かれています。「こら坊主。いたずらばかりしておらんとなあ。たまには，こういう本を読んでみないか。」と，先生からわたされた本は，「アルプスの少女ハイジ」でした。その経験はまさに「感動は心の扉を開く」ものであったようです。以下は，そのエッセイの一部です。

私は、胸の痛い思いがしながら、ハイジの本を読むのであった。ハイジと、アルムの爺さんが、アルプスの岩に腰かけて、夕やけを眺めているところまで読み進んだ。山々や、谷々の里の夕やけている描写が美しかった。
「美しい夕やけだなあ」
と、私は思った。
　ところで、ハイジもまた、夕やけを美しいと思ったのだ。
「お爺ちゃん、なぜ、夕やけは、あんなに美しいの？」
と、お爺さんに聞くのであった。
　私は、その時、ほんとに嬉しかった。体がしびれるほどの喜びを感じるのであった。なぜって、先生たちも、始末に困るといった悪たれ坊主の私と、あの美しい、雪よりも心のきれいなハイジの心は同じなのだ。私と同じように、ハイジもまた夕やけを美しいと思っているのだ。私は感動した。
　アルム爺さんの答えを、すぐ聞くのは、惜しいような気がして、私は、目を閉じて感動にひたっていた。我慢ができなくなって、つづきを読んだ。
「この世の中で、一番美しいものは、人が、おわかれをいうときの言葉よ。夕やけが美しいのはのう。おてんとうさまが、山々にむかって、おわかれをいっているからよ」
とアルムの爺さんは、答えるのであった。
　なんと素晴らしい言葉だと思った。感動した。私は、本をおいて、ぐっと、顔をあげた。

読書体験という言葉があります。読書によって知識，情報，ものの考え方などを得ることも，読書によって感動し心の扉が開かれることも貴重な体験なのです。椋氏の少年時代のエピソードは，読書が人生の原点ともなり得る感動体験であることを教えてくれます。

【本年度の一事徹底事項】「元気なあいさつ」

朝の冷たい空気の中，子どもの元気なあいさつの声は、私を笑顔にしてくれます。冷気の中を元気に歩く子どもたちの姿には，「がんばれよ。」と応援したくなります。そして，これは実に平和な光景だなと思うのです。子どもの元気なあいさつには，明るい未来が予感されるのです。

抵抗力を高めましょう（十分な睡眠　適度な運動　バランスのとれた食事）